

不登校と社会的引きこもり — 発展過程を探り, 対応と予防を考える —

園田順一* 高山巖* 前田直樹** 田中陽子* 栗山和広*

School refusal and social withdrawal : The development,
treatment and prevention

Junichi SONODA, Iwao TAKAYAMA, Naoki MAEDA, Yoko TANAKA, Kazuhiro KURIYAMA

Abstract

Recently, school refusal and social withdrawal have become huge social issue in Japan. This phenomenon is specific for Japanese society, which is considered to be deeply associated with education and child discipline. The present study examined the process of the development of school refusal and social withdrawal. Also we suggested the treatments and prevention, focusing particularly on child discipline at home.

Key Words : School Refusal, Social Withdrawal, Treatment, Prevention

キーワード : 不登校, 社会的引きこもり, 対処法, 予防

はじめに

わが国において, 社会的問題として注目され, その対応について検討が急がれているものは, 不登校(School refusal)と社会的ひきこもり(Social withdrawal or Hikikomori)である。不登校については, その数が年々増え続けていることもあって, 数十年前からいろいろと検討されてきているが, まだ, 十分な成果はみられていない。社会的引きこもりにいたっては, 重大な問題にもかかわらず, その対応については, いまだ方向性がみえない。途方にくれているというのが実情であろう。

子どもの教育的問題としての不登校と社会的問題としての社会的引きこもりの共通しているところは, 一方は子どもの学校活動からの回避行動(Avoidance behavior)であり, 他方は青年の社会的活動からの回避行動である。しかも, 不登校の子どもたちは, そのまま社会的引きこもりになっていくのである。社会的引きこもりの約6割が, 不登校から発展してきたものであるとも言われている。

このようにみえてくると, 不登校にしても, 社会的引きこもりにしても, どちらも現代社会においては, 当然それぞれの場面で人々と交わりながら活動していかなければ

*九州保健福祉大学社会福祉学部臨床福祉学科 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki. 882-8508 Japan

**九州保健福祉大学健康管理センター 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

Health Management Center, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki. 882-8508 Japan

らないものである。そうであるにもかかわらず、彼らは、社会的参加を避け、家の中に留まっているのである。このように学校や社会での活動を避けて、もっぱら自分の世界の中で生活しているようになるのは、どこに問題があるのだろうか。彼らを再び学校や社会に復帰させていくには、どのようにしていけばいいのだろうか。さらに、学校や社会から家に引きこもらせない予防的方法があるのだろうかなど、これら一連の事柄について打開策があるのだろうか。これらのことについて、それぞれ不登校と社会的引きこもりについて検討することにした。

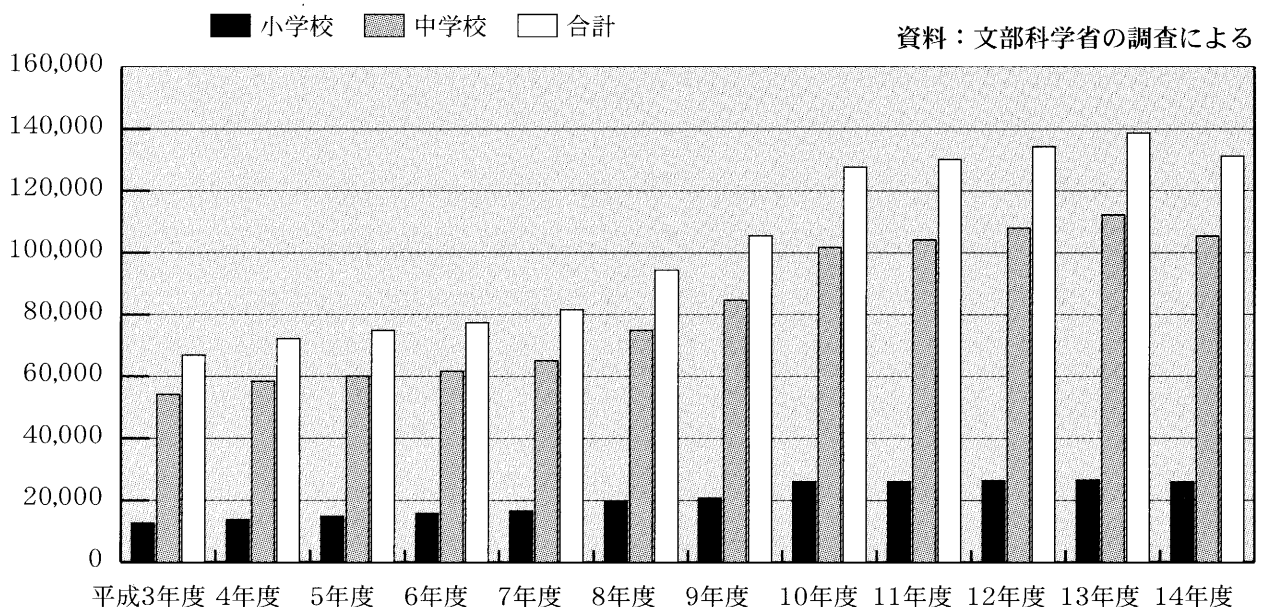
不登校とは

図1は、わが国の不登校数の推移である。文部科学省の全国調査によれば、不登校児童生徒の数は、年々増え続けている。平成14年度においては、年間30日以上学校を休んだ児童生徒は、小学生で25,869名で、比率的には0.033%であり、中学生では、105,342名で、比率は0.288%で、100人に対して約3人が不登校である。ただ平成14年度は僅かに前年度に比べて少なくなっている。今後は、どのような推移をたどるのだろうか。

わが国においては、子ども数が減少しつつあるので、その数ばかりでなく、比率で見えていかねばならないだろう。最近の不登校の概念は、ひろく捉えられているが、明らかに体の病気とか経済的な面や物理的に登校できない場合は、除外されている。客観的にみて当然登校できるのに登校しない、または登校出来ない子どもたちである。このような子どもたちは幼稚園でもみられる。このなかには、いわゆる母子分離不安などで登園できない子どももいる。もちろん高校にも多くの不登校生徒がいる。正確な数は、全国的な調査がなされていないので分からないが、おそらくは中学と同じぐらいの不登校数が推定される。高校になると、不登校も複雑になり、怠学をはじめ、今通学している高校は、自分の意図している高校と異なっていると行かないとか時には精神的障害や心身症で登校できない高校生もいるであろう。わが国の高校では、退学して行く生徒は、県単位でみると、中規模高校が一つ消えていく程の多さであると言われている。

彼らは、朝、頭が痛い、お腹が痛いそして身体がだるいなどと心身症状(Psychosomatic syndrome)を訴えることが多い。この頭痛、腹痛そしてだるいが、朝の不登校児たちがよく訴える心身症状の3大徴候である。そ

図1 不登校児童生徒数の推移（30日以上）



	平成3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
小学校	12,645	13,710	14,769	15,786	16,569	19,498	20,765	26,014	26,044	26,372	26,503	25,869
中学校	54,172	58,421	60,039	61,663	65,022	74,853	84,701	101,680	104,164	107,910	112,193	105,342
計	66,817	72,131	74,808	77,449	81,591	94,351	105,466	127,694	130,208	134,282	138,696	131,211

の他にも熱発、下痢、頻尿、身体の痛みとさまざまな身体的訴えが見られる。これらの症状は朝の登校時間に強く現れ、登校時刻が過ぎると軽減していく。日曜日や休日の朝は顕著に見られないのである。また、登校時刻になってもなかなか起きてこない。起こそうとすれば、ますます布団の中にもぐり込んでしまう。起きてきても、表情を暗くして、のろろと動きが鈍い。強く登校を促すと、それに比例して、拒否も強くなる。時には暴力を振うこともある。いわゆる登校刺激(School stimuli)に対して強い抵抗を示すのである。このような登校拒否反応は、朝の心身症状と同じように、登校時刻が過ぎると、収まっていく。

大部分の不登校児の共通の心理は、1、学校には行きたい、行かねばならない、しかし行けない。2、自分でも登校できない理由ははっきりしない。3、だからといって、自分を病気だとは思っていない。4、学校を強く意識している。5、終日家の中かその周辺にいて、外には出ない。これらが典型的な不登校児の気持ちであるが、最近の不登校児にはいろいろなタイプが出てきた。その中でも、怠惰とか無気力といったような登校への義務感に欠ける子どもが見られるようになった。彼らも学校からの回避行動ではあるが、登校に対する不安とか緊張感には強くない。従って、不登校への対応もそれぞれのタイプによって異なってくるであろう。

ここに、小学生の典型的な不登校例を紹介したい。4年生の女兒である。父親の転勤で、郡部の小学校から中都市の小学校へ転校してきた。最初は登校していたものの2ヶ月が過ぎた頃から、特にはっきりした理由も言わないで、朝になると、頭痛を訴えて、登校を渋るようになった。母親が登校を強く促がしても、表情を暗くして、部屋から動こうとせず、決して学校へ行こうとしなかった。そんな時は終日自室にいて、外へ出ようとしなかった。夜は、明日は学校へ行くと行って時間割を調べて、寝床に入るのである。次の朝になる寝床から出てこない。強く促すと抵抗が強く、そのままになってしまう。このようにして不登校は続いた。

中学生や高校生の場合も大体同じような形で生じている。高校1年生の男子生徒の例をあげると、新しい高校へ入学して間もなく、月曜日の朝、自室から出てこない。母親が起こそうとしても布団を頭からかぶり、顔をあげない。強く促しても、がんと動かないし、登校しない理由を聞いても、何も言わない。親もなすすべもなく、そのままにしておいた。日が立つにつれ、自室で絵を描いたり、漫画本を見たりして日々を過ごすようになった。時には、居間でテレビを観ることもあった。教科書は決

して開こうとはしなかった。親が学校のことに触れると、すぐさま顔色を変え、黙り込んだ。

このような典型例にみるように、大抵の不登校は客観的にははっきりした理由もなく、突然登校しなくなる。しかもそのほとんどは長期化していく。この急性不登校(Acute school refusal)に対して、不登校のなかには、小学校低学年の頃から、登校はしているのだが時々学校を休む子どももいる。慢性不登校(Chronic school refusal)ということになる。

社会的ひきこもりとは

人との接触を避けて、独りで自室か家の中で生活している。自分の家から一歩も出ない人もいるが、夕方になると、近くのコンビニエンスストアや書店に出かけ、食べ物をはじめ、本やCDを買い求めてくる人もいる。とにかく人と交わることを避けて、自室か家の中で生活しているのである。そこでは、パソコンに向かっていてもおれば、音楽に耳を傾けて、一日を過ごす人もいる。新聞やテレビを通して社会とのつながりを保っているが、それは一方方向であり、相互的コミュニケーションはない。このような生活を長く続けていると、独りよがりの考え方に陥っていくし、社会的適応性にますます問題を持つようになってくる。

わが国において、このような社会的引きこもりの青年は、今どれぐらいいるのであろうか。その実態調査はなされていない。このような青年の相談は、関係機関で増えつつあるので、相当の数に上がっているものと思われる。一説によれば、50万人とも言われている。

年齢的には、20代、30代の人たちでしかも男性が多いのである。彼らは一たび社会的に引きこもると、なかなか外へ出ようとしなない、外へ出たい気持ちはあるものの、その機会がない。それでその数は年々増えていくことになる。今では40代の人たちもいる。

社会的引きこもりの典型的な例をあげると、現在26歳の男性で、すでに家に引きこもってから5年が経過している。社会的引きこもりはすでに高校2年の不登校から始まった。通信教育で高校卒業の資格を取り、私立大学を2、3受験したが、いずれも失敗した。それが挫折体験となり、本格的に自室に閉じこもってしまった。トイレ以外は自室から出ないし、家族とも顔を合わそうとしない。食事は、母親が入り口に置いておくと、それを自室にそっと引き入れて食べ、食べ終わると、それを外に出している。自室ではもっぱら音楽CDを聴いて過ごしていた。

不登校と社会的引きこもりの

発現と持続化のメカニズム

先に指摘したように、不登校や社会的ひきこもりは学校や社会を避けて、家の中に逃げている回避行動である。回避行動という場合は、A（学校や社会）という場面からB（家庭や自室）という場面へ逃げて、B場面に留まっている状態である。一般に、A場面は不快で、嫌悪的な場所であり、B場面は安全な場所であるということになる。また、A場面に、そんなにひどい不快刺激がなくともB場面に居心地の良さがあれば、B場面に留まることになるであろう。回避行動の場合は、A場面とB場面の落差が問題になる。不登校の場合、学校状況において、学校での不快刺激、たとえば、いじめ、友達との仲たがひ、学業成績の低下、たくさんの宿題、先生の叱責、転校後にクラスになじめないなどで、学校場面を回避することもあろう。一方、学校状況に特定の不快刺激が無くとも、身体的病気が回復した後もズルズルと休む例にみるように家庭状況に居心地の良さや自由気ままな生活を許す雰囲気があると、不登校が起こる。一方、学校を避けようとしても、家庭がそれを許さないとすれば、不登校は起こらないであろう。

不登校は、本人が学校に関連した事柄をどのように認知しているかによっても左右されるものである。例えば、試験に失敗し、点数が悪かったとすれば、「自分は今もう駄目だ」と思い、自信を喪失するか、それとも「今回はたまたま調子が悪くて、点数が悪かった。次回は努力していい点数を取ろう」と考えるかで、不登校に発展するか、それとも思い直して学校を続けるかである。高学年になれば、この種の学校への認知が不登校に関係してくるのである。

このように見てくると、不登校の発現は、学校状況と家庭状況そしてその個人の学校への捉え方が関係している。不登校のある者は、学校で幾度となく嫌な刺激にさらされたのかもしれないし、また、ある者は、学校でのストレスが強いものでなくとも、彼の回避行動を受け入れるような家庭状況があったのかもしれない。そして、客観的には些細な問題であっても、それを強く受け取り、過敏な性格が災いして、自らストレスを強くして、問題場面から逃避してしまったのかも知れない。同じように、対人関係において適切な関わりが持てなくて、上手に対処していけない、それを苦痛に感じ、そこから逃避して、それが不登校になっていくのである。

このようにみてくると、不登校の発現は、それぞれ個々で違い、総合的に考えていく必要がある。ところ

が、ひとたび不登校になり、家の中に留まると、再登校が困難になり、大抵長期化していく。それが社会的引きこもりとなっていくことになる。なぜ長期化していくのであろうか。第一に、学校場面を避けることで、嫌な気持ちや緊張感が和らぐので、その結果、回避行動としての不登校が強められるのである。第二に、学校を休むことで、教科の遅れ、クラスメートの噂、担任教諭からの欠席理由の尋問などが負担になり、登校への抵抗が強くなる。第三には、初期の不登校の段階での保護者の対応が長期化させていることもある。これはやむを得ない面もあるのだが、例えば、朝、子どもが身体症状を訴えると、体のどこかが悪いのではないかと心配し、登校への働きかけを止めてしまう。また、子どもが強く拒否し、大声を出したりすると、登校を促すのを止めてしまい、子どものなすがままにしてしまう。このような理由から、不登校は、長期化の道をたどっていくことになる。

社会的引きこもりについても、不登校と同じような発現のメカニズムがある。基本的には、どんな人間も、個人にとって不快な状況を避け、安全な所に逃げ、そこに留まるものである。それを実行に移したのが社会的引きこもりの人たちである。彼らは、社会で強いストレスを受けたであろうし、引き込まざるを得ない体験をしたであろう。具体的にいうと、大学受験や就職試験の失敗というような挫折体験、そして職場での人間関係のつまづきなどである。本人自身の問題として、他の人々への対人恐怖、アトピー性皮膚炎などの心身症、対人関係対処の過敏、傷つき易さや対処能力の欠如などがある。一たび引きこもると、なかなか出られないのである。引きこもりが長くなると、社会的適応性も低くなるし、何かの仕事に就くことも不利になる。今日的現実問題として不可能に近い。家の中で生活するしかないということになる。

不登校の学校復帰と社会的ひきこもりの社会参加

不登校が長期化すると、学校復帰がますます困難になってしまう。一般に回避行動は、いったん安全な場所に逃げ込むと、そこからなかなか出られないものである。不登校は再び登校させようとする、非常に抵抗が強い。いわゆる登校刺激に対して、過敏に反応し、拒否反応をおこすものである。どんな方法をとっても再登校は難しいのは当たり前である。しかし何とかして登校させなければならない。しかしながら、登校への促しに対して、強い抵抗を示す。従って、保護者も諦めざるを得ない。不登校児のなすがままになってしまうのである。このよ

うにして、大抵の不登校児は家に留まり、不登校が長期化してしまう。それが社会的ひきこもりになっていくのは、先に述べたとおりである。

このような状況のなかで、再登校への手立てを考えていかねばならない。それを総合的にみていくと、学校場面での嫌悪刺激となるものを可能な範囲で除去し、登校しやすいクラスをつくり、一方家庭においては、回避行動を遮断し、何がなんでも登校へと積極的に働きかけることである。学校には、いじめなど一部解決しなければならない問題もあるが、具体的に解決を要するような事柄は、そんなに多いものではない。むしろ、その回避行動を阻止しえない家庭状況に問題があるし、また学校での事柄に適切に対処し得ない子どもの対処能力に問題があることに注目しなければならない。

とにかく登校拒否への介入は、早ければ早いほど良い。登校拒否の兆しがあれば、すかさず対処することである。

「登校刺激を与えるな」とはもっての外である。その初期に適切に対処しないから、長期化するし、しかも長期化すればするほど学校復帰は難しいのである。不登校では、保護者の子どもに対する態度が非常に大切である。保護者はどんなことをしてでも、子どもを登校させるのだという強い姿勢と信念をもつことである。保護者は毅然たる態度で子どもと対決するのである。たとえ子どもの拒否が強くてもそれに負けてはいけなく、あくまでも登校させるのだという強い態度を、子どもが登校するまで堅持し、諦めてはいけなく、子どもと根気比べをしていると思ひ、それに親が負けたら、登校は失敗であると思わなければならない。

行動科学の観点からは、具体的な学校復帰の方法は2つある。一つは、学校へ段階的に近づけていく方法である（学校接近法）。他は、学校場面に曝す(Exposure)という方法である。これは、保護者の協力で子ども自身が勇気を持って直接登校することである。それができなければ、拒否する子どもを強制的に学校へ連れて行き、教室に留まらせるのである。そうすることで、一挙に不登校は解消する。こんな方法は、手荒いやり方で、心理療法にそぐわないと思うかもしれないが、行動科学に則った行動療法においては、暴露療法(Exposure therapy)として、恐怖症や強迫神経症に適用され、効果を挙げている方法である。不登校の心理的治療法として、積極的に用いるべきであろう。社会的ひきこもりにさせないためにも、不登校の段階で、学校復帰させておくことである。

もうひとつの問題である社会的ひきこもりに対して、再び社会参加が出来るようにもっていくには、どのよう

な方法があるであろうか。これも、不登校と同じように、段階的に社会参加をさせていく方法である。これを根気強く続けていくことになる。他は、直接集団生活を体験させる方法である。それは社会参加を志向している施設か精神病院で、社会参加訓練をおこなうのである。これらについては未だ成果をみていない。緊急の解決法が求められている。

わが国の不登校や引きこもりの原因

諸外国においても、不登校や引きこもりは見られる。しかし、日本ほど社会問題化していないようである。不登校と言っても、発展途上国などは、学校に行きたくとも、家族の働き手として学校に行かないで労働するとか、家庭がなく自分で生活していくために学校に行けない。先進国のスウェーデンなどは、雪国であるにもかかわらず、子どもを出来るだけ外で遊ばせて、その時は決して家の中には入れないようにしているそうである。また、イギリスでは子どもが不登校になったら、すぐさま警察に依頼して学校へ連れていくそうである。

わが国ほど、不登校や引きこもりを生み出す家庭や社会はない。また、不登校や引きこもりになっても、積極的関わりをとらない。登校しない子どもや引きこもっている者にはそれなりの理由があるのだから、その人の心情を理解し、そっとしておく。行かせるような刺激や外出への働きかけは望ましくないという考え方が一般的である。しかしながら、不登校や引きこもりは社会から回避して家の中に独りでいることである。それは回避行動である。一般に回避行動の場合は、自然と解消することは極めて難しい。解消するように積極的に働きかけるしかない。それは、段階的に学校や社会に向かわせ、また、それを後押しすることである。そこには治療教育的技法を適切に用いなければならない。

まず、不登校をみると、そこには、いろいろな要因が絡んでいて、単一には論じられないが、少なくとも学校の問題、家庭の問題そして子ども自身の問題が関わっている。子どもは学校が楽しいと感じ、行き甲斐を持っておれば、不登校にはならないだろうし、一方、子どもが登校したくない時に、家庭に押し出す力があれば、不登校は生じないであろう。子ども自身に少々嫌なことがあっても、それを乗り越える力があれば、学校場면을回避しないであろう。

この様に見てくると、現代の学校は子ども1人ひとりを十分に受け入れ、学校が行き甲斐があつて、楽しく勉強できる場になっているだろうか。先生は1人ひとりの

児童・生徒に目配りして、熱心に教育がなされているであろうか。クラスの中で、お互いに受け入れられ、仲の良い関係になっているであろうか。1人ひとりが認められている学級が不登校を少なくしていくものと思われる。

現代の家庭はどうであろうか。不登校を起こさせる要因はないであろうか。子どもの発達過程で保護者の対応に問題はないであろうか。不登校や引きこもりは、学校や社会での事柄に対して適切に対処できずに、そこから逃避したのではないか。そのような逃避傾向がその発達過程で形成されたのではないか。本来子どもは、生きるに積極的で、好奇心旺盛で、活動的である。だが、今の保護者や大人はそれを適切に伸ばしているであろうか。むしろそれを抑えたり、歪めているのではないか。たとえば、その発達過程で何かに直面した時に、その子どもなりに自分で解決していく体験が大切なのに、代りに、保護者や周りの者が手助けしているか、もしくは何もしないで済ませている。物事に適切に対処していくとか他の人たちと上手に関わっていく体験があまりない。それで、家庭、学校や地域社会での一寸した出来事でも、子どもはそれを乗り越えていけずに逃げてしまうのである。その延長線上に不登校や引きこもりがあると見ていい。

今の子どもたちは、嫌なことやきついことはやりたがらないし、保護者もさせない。それで達成感や成功感を味わうことが極めて少ないのではないか。これが問題である。不登校や引きこもりを予防するには、幼少の頃から、発達段階に応じて、色んなことを体験させ、同年代の子どもと遊んで、他人との交わりを深めることであろう。

一般に不登校や引きこもりの父親は、家庭の中で影が薄いといわれている。家庭での父親は、子どもにやさしいし、何でもしてくれる。また、子どもとほとんど関わらずにきている。このことは、子どもが不登校の兆しがあった時に、毅然としてそれを阻止する力を発揮できないことにもなる。

子どもが、一旦家に引きこもると、なかなか元へ戻ることは難しい。保護者から学校へ行くように強く勧められても、抵抗をしめす。回避行動はそのままにしておくとして自然に学校復帰することはない。登校するように、強く説得するとかそのままにしておくことで退学か留年になる、さらには強制的に押し出すことで回避行動をやめさせるのである。それでもうまくいくとは限らない。しかも、しばらく休むことで、教科の遅れで授業についていけないという不安、クラスメートが自分のことを非難し

ているのではないか、先生に注意されるのではないかなどのが気になり、2次的障害でますます行けなくなる。彼らはただ安易に引きこもっているわけではない。学校へは行きたい。行かねばならない。しかし行く勇気がない。内的な葛藤に悩むのである。

不登校や引きこもりにさせないための子育て10か条

1. 両親は仲がよく、家庭は明るいことである。
子育ては、お母さんとお父さんが仲よく、協力し合って行う。家庭は安定しており、いつでも飛び立ち、いつでも帰れる空母が望ましい。こどもの成長にとっての不幸は両親が仲たがいがいし、子育てがちぐはぐなことである。
2. 2, 3歳までは、母親とのスキンシップを十分に行かない、愛情を注ぎ、信頼感を育てる。
不登校児の中には、母子分離不安を抱き、家から離れられない子どもがいる。このような子どもは、幼少期の母子関係のスキンシップに満たされないとこころがあり、幼稚園や小学校に行く年齢になっても、親や家庭から離れることに不安を持つのである。家庭や親子関係が安定し、安心感や満足感があれば、子どもはいつでも家から離れることができる。家庭は空母で、子どもが安心して帰ってくる場所でもある。
3. 子どもはかばうよりも立ち向かわせよう。
一般に、不登校や引きこもりを示す子どもは、過保護に育てられている。母親をはじめ、周りの者が幼少時から彼らに手を貸し、あれこれと面倒をみてきている。少しでも嫌なことやきついことがあると、親に頼り、助けを求める。自分自身で問題に立ち向かい、自分で解決していく、そんな体験をさせ、それを親は見守り、励まし、それが出来たら大いに褒めてやる。自ら解決する体験に乏しいと、ちょっとしたことで、挫折したり、その場から逃げてしまう。
4. 子どもはいろいろな体験を積ませる。
最近、子どもたちが外で遊び回ることが少なくなった。家の中で一人で遊んだり、テレビを見たり、ファミコンに熱中している。そのため、友達と上手に付き合うことが出来ない。友達との関係で嫌なことがあると、家の中に逃げ込む傾向にある。子どもは出来るだけ家から出し、子ども同士で仲良く遊び、または喧嘩をしては仲直りし、いじめにあったらそれに立ち向かい、いろいろと体験することが大切で

ある。また、子どもの成長には、積極的に冒険をさせることも必要である。このような体験を通して他人との協調性も生まれ、積極的になり、少々の困難にも耐えられる耐性力が身につく。

5. 子どもに物を与えすぎない。

今は物が豊かになり、子ども達は幼少時から物を与えられ、欲しいものは何でも手に入る。欲しくなくとも親は勝手に与えている。そのような中で生活していると、欲しいものは何でも手に入ると思い、その要求も次第にエスカレートしていく。その要求を親がかなえてくれないとたいへんである。もともと我慢することがないので、親に暴力を振ったり、無理難題を吹っかけて親を困らせる。裏を返せば、親に対して依存があり、甘えがある。物を与えすぎると、工夫する気持ちも起こらないし、感激もない。もっと困ったことには、我慢する心が育たないのである。

6. 子どもに期待し過ぎない。

親が子どもの学業成績が上がるとかスポーツで優勝するなど期待することは大切なことである。しかし、過ぎたるは及ばざるが如しで、親が子どもにあまり期待をもち過ぎると、それに押しつぶされてしまう。親は子どもに最高の教育を受けさせ、良い高校、一流の大学を目指し、親の敷いたレールを走らせようとする。子どもはその期待を背負って、塾に、予備校にと、時間に追われて生活することになる。それが順調に進んでいるうちはいいが、何かのきっかけで親の期待に沿えなくなった時（たとえば学業成績の低下）、その反動が出て、勉強を放棄し、学校を拒否する行動に出ることがある。親の強い期待が裏目に出てしまう。親の期待は“ほどほど”が肝心である。

7. 自立させることが第一である。

子どもが大きくなっても、あれこれと世話をすることが、親の愛情であり、務めであると思っている親がいる。子どもの方は、それを拒否することもあるが、親がしてくれることをごく当然のように思ってしまいがちである。これでは自分の力で最後までやり通す力をつかない。十分に手をかけてやるのは3、4歳までで、後は発達段階に応じて、自分でやれることは子どもに任せることである。子どもが自分で出来たら、親はそれを褒めてやる。

8. 父親は家庭の中で父親像を確立する。

最近の父親は、子どもに優しく、理解があり、物分りがよいと言われている。不登校児の親も、等し

くこのような父親であり、家庭の中で影が薄い。子どもの成長にとって、特に男の子は、立ち向かってははね返され、壁があり、さらには、悪い行いやわがままな行為に対しては、強い注意や抑制（叱責、罰や拒否）をする大人がいなければならない。これが父親だ。仕事には熱心だが、子どもには甘く、不登校が起こっても断固とした態度がとれない。父親はここぞというときには毅然たる態度で子どもと対決し、肝心な時は家庭の中で存在感のある父親であることである。子どもにとっての父親は、尊敬できる大人であり、ちよっぴり怖い男であって欲しいものである。畏敬される父親がいい。

9. 子どもの日常生活を正す。

不登校や引きこもりになると、夜は遅くまで起きており、朝は起きない。昼夜逆転している。大抵、布団は敷きっぱなしである。食事も家族と一緒にしない。一般的には、家庭においては朝食も夕食も家族そろって一緒にとることである。しかも、朝も早く起床し、規則正しい生活が大切である。母親が遅くまで床に入っていると、子どもも朝寝をする。これが不登校につながっていく。子どもは家の手伝いや毎日行う日課を決めていて、実行するようにする。子どもは机に向かって勉強さえしておればいいと親子とも思っているとすれば、考え違いである。

10. 子どもに責任をとらせる。

子どもにとって嫌なこと、したくないことは、親や周囲の者が代わってしていないであろうか。子どもにはその力の程度で色々なことをさせ、出来ないようだったら、親も手伝ってやる。しかし、あくまでも子どもが主体である。失敗してもいい、それを踏まえて再挑戦すればいい。子どもの行ったことは、子ども自身に責任をとらせることである。そうすることが、困難な場面に直面した時、その場から逃避しない人間を作り上げることになる。

参考文献

- 1) 小野昌彦：不登校の研究動向—症状論，原因論，治療論，そして積極的アプローチ—。特殊教育学研究，35，45—55，1997。
- 2) 小林正幸，田中陽子，神村栄一：不登校事例の改善に関する研究—登校行動改善の規定要因—。カウンセリング研究，28，131-142，1995。
- 3) 斉藤環：社会的ひきこもり—終わらない思春期。PHP新書，1998。
- 4) 桜井利行：社会的ひきこもりに関する文献的考察。

大阪大学教育学年報. 7, 205-217, 2002.

- 5) Kearney, C.A. & Albano, A.M. : When children refuse school ; A cognitive-behavioral therapy approach. Therapy Works, 2000.
- 6) 園田順一 : 学校恐怖症に関する臨床心理学的研究—行動理論からのアプローチ—. 鹿児島大学医学雑誌, 23, 581-619, 1971.
- 7) 園田順一 : 登校拒否について. 行動療法研究, 5, 40-43, 1980.
- 8) 園田順一 : 登校拒否児の治療と実際—行動療法—. 教育心理, 33, 432-435, 1985.
- 9) 園田順一, 高山巖, 田中陽子 : 強迫症状を伴う引きこもりの行動療法. 日本行動療法学会第27回大会発表論文集, 111-112, 2001.